和歌一字抄下巻原撰本の本文

日比野　浩　信

和歌一字抄の伝本は、後人の増補歌を持たない原撰本、藤原定家・西行以下鎌倉中期頃までの歌を含む増補本、定家の歌を含むが増補本よりも歌数が少ない中間本の三系統に分類され、更に原撰本は二類に、増補本は五類に分類されている。

原撰本の下巻は、長い間、見出されていなかったが、大阪青山短期大学所蔵伝後光厳院筆本が伊井春樹氏によって紹介[1]され、上巻・下巻ともに原撰本系統と目されるに至った。ただ残念ながら、その本文は未だ公にはされておらず、隔靴掻痒の感は否めなかったが、下巻のみの零本ながら原撰本系統の本文を有すると思しき伝本が架蔵に帰したため、その本文を示し、原撰本としての位置付けを確認[2]した。その後、さらにもう一本、下巻の原撰本が出現し、伊倉史人氏によって報告[3]がなされた。これについては、近く本文が公開されると仄聞している。

本稿では、これまで下巻原撰本の本文を披見できなかったことを鑑み、今後の検討に備えるべく架蔵本の本文について極簡単に述べておきたい。

なお、伊倉氏の呼称に従い、架蔵本を「日比野本」と呼称することとし、下巻本文の比較には、この日比野本（日）の他に、中間本は三康図書館蔵本（中）、増補本は宮内庁書陵部蔵本（増）を用い[4]る。原撰本が始めに成り、その後、増補されて中間本、更に増補本へという過程が容易に推測[5]されるが、そのことからは、日比野本と中間本、中間本と増補本が

それぞれ近似し、日比野本と増補本が乖離していることが「理想的」であるが、必ずしもそうではなさそうである。

一

まずは、作者名が、歌の出入り以外で該本の系統を明確にする要素となる。

上巻の場合、原撰本は更に原撰Ⅰと原撰Ⅱの二類に分類できるが、例えば忠通を原撰本Ⅰでは「殿下」、他系統本では「関白」というように明確に異なっている。これについては井上宗雄氏[6]が

作者名表記における関白・内大臣に関していえば、内閣本（稿者注・原撰Ⅱ）の方が整備された、いわば勅撰集的な書き方で、日常的な呼称を用いている三康本（稿者注・原撰Ⅰ）の方が草稿的であるといえよう。

として、原撰Ⅰが日常的な呼称で草稿的、他の系統本が整備された勅撰集的と指摘された。

これを、日比野本での作者名をも合わせ掲出したのが次の表である。

実名	原撰Ⅰ	原撰Ⅱ・中間・増補本	日比野本
忠通	殿下	関白	関白
有仁	仁和寺左府	花園左大臣	花園左大臣
実行	大相国	太政大臣	太政大臣
実能	内府	内大臣	（下巻にナシ）
顕房	六条右府	六条右大臣	（下巻にナシ）
頼宗	堀河右府	堀河右大臣	堀河右大臣

実能、顕房の歌が下巻には無いが、忠通・有仁・実行・頼宗については、原撰Ⅱ・中間・増補本と一致、即ち、草稿的性格の原撰Ⅰではないことになるこの作者名表記から、日比野本を原撰Ⅱに分類すべきことが確認できる。[7]

その他の作者名の異同には、次のようなものがある。

A 省略	B 有無	C 小書の有無
① 2 (598) 顕季	① 400 (1083) 敦忠 素性	① 123 (744) 源能基
中 顕季**卿**	中 ナシ	中 源能基兵部少輔
増 顕季**卿**	増 **素性**	増 源能基兵部少輔
② 7 (608) 家経	② 401 (1084) ナシ	② 240 (891) 師経卿
中 藤家経**朝臣**	中 敦正顕忠卿	中 師経卿大蔵卿
増 藤原家経**朝臣**	増 敦忠卿或本顕忠卿	増 師経卿大蔵卿
③ 44 (650) **藤**隆資		③ 283 (938) 藤敦家
中 **藤**隆資		中 藤敦家朝臣左馬頭
増 藤原隆賢		増 藤敦家朝臣左馬頭
④ 302 (962) 永胤		
中 永胤		
増 永胤**法師**		

Aのように、日比野本では、①「卿」②「朝臣」④「法師」のような身分・官職を示す語を省略し、③では「藤原」を「藤」とするなど簡略化の傾向にある。Bは、それぞれ誤脱の可能性がある。Cは官職などの小書きで、日比野本では皆無である。原撰本上巻にも作者名の小書きはみられるので、日比野本における省略であろう。総じて作者名についての省略・有無の異同は、本文生成の過程、各系統の特質を示すものではなさそうである。

また、人物名そのものの相違は七例ほどある。

D 別人物（※当該歌の他出を付す）			
① 83 (697) 顕季	② 101 (720) 兼房	③ 104 (723) 為頼	④ 151 (776) 源仲通
㊥ 顕季卿	㊥ **匡房卿**	㊥ 為頼朝臣（義イ）	㊥ 源仲通（正イ）
㊦ **俊頼**	㊦ **匡房**	㊦ 為義朝臣	㊦ 源仲正
散木集（俊頼）	金葉集・匡房集	他出未確認	他出未確認
⑤ 177 (806) 仲通	⑥ 277 (931) 範成	⑦ 296 (952) 兼房	
㊥ 仲正	㊥ **範永朝臣**	㊥ **匡房卿**	
㊦ 仲正	㊦ 範永	㊦ 匡房（匡イ）兼房	
他出未確認	範永集	匡房集	

これらのうち他出が確認できる①②⑥⑦の四首については、それぞれの家集に入集していることもあり、他文献との一致を理由に正しい思われる作者名を決定し得る。異同のある作者名の中で、日比野本での作者名が妥当であろうという箇所はない。題と和歌との関連が第一義であり、作者名はさほど重要視していない書写態度であるといえるのかもしれないが、いずれにせよ、各系統の性質に起因する異同ではなさそうである。

二

次に、巻頭の標目目次と本文中の標目についてみておこう。巻頭の目次は、各系統本において、概ね以下のようにある。

上巻　原撰Ⅰ　東　北・・・　（番号ナシ）

原撰Ⅱ　東一　北二・・・　（番号アリ）

下巻　㊐　客　友・・・　（番号ナシ）
　　㊥　客百一　友百二・・・　（番号アリ）
　　㊦　客百一　友百二・・・　（番号アリ）

ここでは、一字題の通し番号の有無が問題となろうが、上巻では原撰Ⅰに通し番号は無く、原撰Ⅱには通し番号がある。日比野本では通し番号が無く、原撰Ⅰと性質を同じくしている。しかし、先述のように、日比野本は原撰Ⅱに分類されるべきであり、より早期に成ったものには番号が無く、後に成った段階で番号が付されたと考えることはできない。

本文中の標目についても、上・下巻通じての傾向は不明瞭である。

上巻　原撰Ⅰ　東　北　上　（以下、標目ナシ）
　　原撰Ⅱ　東一　北二　上三　中四　下五・・・

下巻　㊐　本文中に標目ナシ
　　㊥　客一　友二…不帰廿　×　傳廿二　望　眺望廿三　見廿四　×　未聞廿六・・・
　　㊦　客　友　…不帰　尋　傳　望　見　聞　未聞　・・・

上巻の本文中の標目については、原撰Ⅰは通し番号が無いのみならず、「東」から「田家」まで百項目あるうち、標目を立てるのは始めの「東・北・上」の三項目のみで、以下「中」から「田家」までは標目が無い。原撰Ⅱでは通し番号を付した標目を立てている。そのような意味からは、日比野本は巻頭標目同様、原撰Ⅰにより近い傾向であるといえる。なお中間本では本文中に通し番号のある標目を立てているが、途中「×」で示したように標目を欠く場合でも、通し番号は正確に付しているところから、中間本に誤脱があることは明白である。また、増補本には、書陵部蔵本のごとくに通し番号が無いものもあれば、例えば、書陵部蔵本と極めて近しい関係にある伝鷲尾隆康筆切では通し番号を付すなど一定していない。こうしてみると、目次における通し番号と、本文中の標目とは、必ずしも上巻と下巻とでは、また、同一系統内に

おいてさえも同一ではない。通し番号は、後代の便宜的措置と考えるべきかもしれないが、ここでは、下巻の巻頭標目は、日比野本では通し番号を付さないが、中間本と増補本では通し番号を付す傾向にあること、本文中の標目は日比野本には全く無いこと、そしてそれらは、上巻原撰Ⅱの傾向とも異なるものであることを指摘するに留めたい。

三

歌題については三十箇所ほどに異同が見受けられるが、一部のみ掲出しておく。

日比野本と三康本が一致	三康本と書陵部本が一致	日比野本と書陵部本が一致	全て不一致
① 95 (711) 山居**眺**望 (中) 山居**眺**望 (増) 山居夕望	④ 4 (600) 野客吹笛 (中) **行**客吹笛 (増) **行**客吹笛	⑦ 65 (676) **郭公留客** (中) 客郭公留 (増) **時鳥留客**	⑩ 96 (713) 海上晩望 (中) 海上暁望(タイ) (増) 海上夕望
② 190 (820) 梅**花**染衣 (中) 梅**花**染衣 (増) 梅香染衣	⑤ 193 (823) 梅告春色 (中) 梅告春**近** (増) 梅告春**近**	⑧ 218 (860) 夜思**梅**花 (中) 夜思桜花 (増) 夜思**梅**花	⑪ 388 (1069) 霧春 (中) 霧春霞(霧歟) (増) 霧
③ 331 (994) 菊送多**年** (中) 菊送多**年**(秋イ) (増) 菊送多秋	⑥ 232 (874) 心中述懐 (中) **雨**中述懐 (増) **雨**中述懐	⑨ 353 (1027) **織女雲為衣** (中) 織女作雲為 (増) **織女雲為衣**	⑫ 456 (1153) 鼻比立見人 (中) 鼻比弓見人 (増) 鼻比見
④ 457 (1154) **遠地** (中) **遠地** (増) 此比遠地イ			

歌題は基本的に、典拠歌集に依拠しない独自のもので、清輔自身の手に成るものであろうから、内容的な齟齬の無い場合には、清輔による改変などの可能性をも考慮せねばならない。一部確認すると、増補本のみが他とは異なる①「山居眺望」は、

山居眺望　　隆俊

いりしより都のかたをなかめつゝ山のたかねにけふもくらしつ

とある。恐らく「いりしより」を「山に入る」のではなく、「日が入る」と誤解したことによる増補本の誤りとみられるのではないか。

また日比野本のみが異なる④「野客吹笛」は、

野客吹笛　　家経

笛の音は月にたかくそきこゆなる道の空にてよやふけぬらむ

藤経衡

旅人のふきてすくなるふゑの音をまつやとならはきぬときかまし

とあるが、共に「野」の要素は無く、「道の空」「旅人」から「行客」が正しかろう。直前の題が「野花留客」とあり、それに引かれての日比野本の誤りであろう。

三康本のみ他の二本とは異なる⑦は、

郭公留客　　俊頼

たかために旅ねをすれはほとゝきすまたともなかてさよふかすらん

のようにあるが、「客郭公留」では理解しかねる。後続の歌題が「野花留客」「紅葉留客」とあることから、ここではやはり「郭公留客」が正しかろう。

子細に検討し、歌内容と題の整合性を考慮する必要はあるが、清輔自身による改変ではなく、後代における歌内容からの改変（改竄）や誤写によって生じた異同であろう。よって、やはり系統の特質を示すものではなさそうである。

四

歌句には、漢字仮名の別、仮名遣いの違いを除いても、約三百首に異同がある。紙幅の都合もあり、微細な異同の掲出や一々の検討は省略に従い、極一部のみ掲出して、日比野本の本文を原撰本の本文として性格付けできるものか否かに焦点を当てることとしたい。

なお、以下掲出に際し、現状においては他文献との接触を考慮する必要がないことから、他出の見られない歌（⊗）や、また、同じ清輔の手になる続詞花集にも入集する歌（続）と袋草紙にもみられる歌[8]（袋）を意識的に掲出するようにした。

結論から先に言えば、日比野本は、原撰本に位置すべき伝本であるといえども、その歌句については、必ずしも原態を伝えるものばかりではなく、各系統間の異同も、各系統生成の過程を示し得るとは限らないようである。

1　日比野本と中間本が一致し、増補本のみが異なる例

①70(681)　おしまれて**はとふく**秋もうつろへる菊をは=ゑこそ見すてさりけれ
中　**鳩ふく**秋も
増　花咲(過行イ)秋も　（神「過行」）

②92(708)　もろともにすむ月なくは山里に**ひとりや**秋のよをあかさまし　⊗
中　**ひとりや**秋の
増　いかてか秋の

③324(987)　**なつかしき**かのみこそすれ山里は梅のにほはぬやとしなければ

中　**なつかしき**

増　むつましき（他本、傍書あるものあるも、根幹は「むつましき」）

続　**なつかしき**香のみこそすれ山里は梅のにほはぬ宿しなければ（二九）

④371(1051)　白露のそこにひかりは**うつれ**ともとまらてそゆく秋のよのつき

中　**うつれ**とも

増　やとれとも

袋　しら露の底にひかりは**うつれ**どもとまらでぞ行く秋の夜のかぜ（七〇五）

⑤366(1046)　あしひきの山を**たより**にゆふつくよいつかと君をまつかくるしさ

中　山を**たより**にゆふつくよ（こたかみイ）（きを）

増　山をこたかみ夕月夜

袋　足引の　山をこだかみ夕月を　いつかと君をまつがくるしさ（七〇〇）

①の歌は散木奇歌集に

をしまれてはなふく秋もうつろへる菊をばえこそみすてざりけれ（五四五）

とある。「はなさく」とする伝本[9]もあって、増補本系統が典拠に近そうではある。「はと」と「はな」、「ふく（吹）」と「さく（咲）」の類似から異文が生じたようだが、増補本の傍書や神宮文庫蔵本にみられる「過行」などが生じた原因は不明と言うほかない。「はとふく秋」は和歌童蒙抄・奥義抄・袖中抄などに取り上げられる歌語で、清輔自身も

ますらをのはとふく秋やはてぬらんしのびし人の音だにもせず（清輔集・二四〇）

のように詠んでおり、「はとふく秋」とする蓋然性は無いわけではなく、いずれを和歌一字抄本来の本文であるかは判断しづらい。

②の歌は他出が認めらず、現段階では増補本が特殊と言うほかない。

③は、同じ清輔の手に成る続詞花集が日比野本・中間本と一致している。④も同様で、第五句「秋の夜のかぜ」は袋草紙のみが異なるが、第三句「うつれども」は日比野本・中間本と袋草紙が一致する。この比較に拠れば、③は「なつかしき」が、④は「うつれども」とする本文こそが清輔が利用した本来的な本文を伝えているものと考えるのが穏当であり、増補本系統における異同は、その系統の生成過程における派生と考えたくなる。

ところが、⑤のように、袋草紙が増補本と一致する例が存することによって、必ずしも生成過程が先行するはずの日比野本の本文が、清輔が利用した本文を純粋に伝えているわけではないと認めざるを得ないようである。

2　日比野本と増補本が一致し、中間本が異なる例

①300 (960)
ゆふされ**の　風のけしきの**すゝしさにしかなきぬへき心ちこそすれ
㊥　夕されは　のかせのけしき
㊦　夕され**の　風のけしきの**　（京「夕されは」筑「夕去（の）は」）

②351 (1025)
吉野**やま**ふゝくあらしに浪たかみみきはの氷むすひかぬらん　⊗
㊥　芳野川
㊦　よしの**山**

③405 (1088)
旅ねしてつまこひ**すれは**時鳥神なひ山にさよふけてけり（なく）
㊥　つまこひすらし
㊦　妻恋　**すれは**

(袋)　旅ねして妻恋　すらし時鳥神なび山にさ夜深けてなく（七四七）

①は、清輔の父・顕輔の家集に

ゆふざれのかぜのけしきのすずしさにしかなきぬべき心地こそすれ（三五三）

とある。他の歌集には見いだせず、いずれより生じた本文であるのかは不明であるが、現存中間本が特殊な本文であることは指摘できよう。

②は、他出の認められない歌の異同であるが、中間本のみが異なる。

③は、中間本のみが異なっているが、その異文は袋草紙と一致している。同じ清輔の著述として一致しているのであり、一般的には、これを本来の本文と考えるべきであろう。しかし、この一例を以て中間本の本文こそを正しいと認めることができるわけではないことはいうまでもない。

何より、日比野本と増補本が近似している時点で、現存の本文は、その生成過程を反映しておらず、各系統の特性が保持されていないということになる。

3　中間本と増補本が一致し、日比野本のみが異なる

①166(795)　としふかく庭の木の葉もなりぬれは雪をいたゝく物にそ有ける　(×)

(中)　庭の草葉も

(増)　庭の草葉も

②170(799)　わか心いかにせよとてちりつもる花さへさそふ風のなからむ　(×)

(中)　花さへ**風のさそふなる**らん

(増)　花さへ**風のさそふ成**らん

③449 (1138) 中　あをによしならの都に行人　もかも草の枕旅ゆく舟のとまりつけ南
行人　**もかな**　とまりつけなん（むにィ）
増　行人　**もかな**　泊つけなん
袋　青によしならの都へ　行く人もがも草枕旅行く舟の　とりつげむま（ママ）（八二八）

④383 (1064) 中　秋の田のほのうへきりあふあさかすみいつれのかたにわかこひやみん（せ）
わかこひ**やまん**
増　我恋**やまん**
袋　秋の田のほのうへきりあふ朝霞いづくのかたに　わが恋**やまん**（七二〇）

⑤411 (1095) 中　しほの山さしての磯に鳴（すむ）ちとり　君かみちよ（を）やちよとそなく
なく（すむ歟）千とり　君か**御代をは**千よとそなく（ママ）
増　**なく**千鳥　君か**御代をは**八千世とそなく
袋　しほの山さしでの磯に**鳴く**千鳥　君が**御代をば**やちよとぞなく（七五六）

①②は他出が確認できず、まさに日比野本においてのみ存在する本文ということになる。現時点では、いかなる過程において生じた本文であるかは全く不明であるが、単なる誤脱や、派生的に生じた本文でもなさそうである。一般的に考えれば、これを以て原態とし、中間本・増補本の本文へと変遷したとみるべきかもしれない。また、③は日比野本が袋草紙と一致する例であり、原撰本としての本文の在り方としては最も望ましい。

しかし、④⑤のように日比野本が袋草紙とも異なり、清輔著述としても独自というべきものもある。このような例の存在によって、日比野本の本文をこそ原態を示す原撰本の本文であると、断定的に位置付けることは避けねばなるまい。

4　異同の混在

①30(636)　わすれにし人し(も)とひけり　山里は月てはとこそまつへかりけれ
(中)　人もすひけり　秋のよは
(増)　人もとひけり(そるイ)　秋のよは

②123(744)　雪ふかしみ山かくれの嶌のわれはかりこそ春をまつらめ　⊗
(中)　雪ふかき　山かくれなる嶌の　春をまつらめ
(増)　雪ふかき　山かくれなる嶌も（稲「の(もイ)」）　春をしるらめ

③223(867)　ぬれつゝもあけはまつみむみやきのゝもとあらの萩　しほれしぬらむ
(中)　ぬれつゝも　もとあらの小萩
(増)　ぬれ〳〵も　もとあらの小萩（丹「小萩(はきは家)」）
(続)　ぬれぬれもあけばまづみむみやぎののもとあらのこはぎしをれしぬらん（二二二）

④450(1139)　ひとりぬるわかたまくらをひるはほしよるはくらしていくよへぬらん
(中)　ひとりぬる　よるはぬらして
(増)　独寝の　よるはくらして(ぬイ)
(袋)　独ぬる我が手枕をひるはほし　よるはぬらしていく夜へぬらん（八二九）

⑤149(774)　池水にこよひの月をうつしもて心のまゝにわかものとみる
(中)　池水に　うつしみて
(増)　池水の(に歟)　うつしもて（藤「ても」）

袋　池水**に**こよひの月をやどし**もて**心のままに我が物とみる（一四二）

⑥380(1061)
中　春かすみたなひく山の桜花はやくみましを　ちり**うせぬ間に**（にけり）

春雨の　ちり**うせぬまに**（にけりィ）

増　**春雨の**　散うせにけり

袋　**春雨の**たなびく山のさくら花はやくみましを散りすぎにけり（七一七）

一首の内に異同が複数箇所あり、しかもそれぞれが系統をまたいで混在しており、歌句の異同を手掛かりとした各系統の位置付けは困難となる。また、本文の系統間における近似と乖離から、先にも触れたように、少なくとも現存本に拠る限り、和歌一字抄の本文は、必ずしも原撰本→中間本→増補本という、生成の過程を反映する本文が残されているわけではない。更に、清輔の利用した典拠本文本来の歌句を伝えているか否かも不明瞭といわざるを得ない。[10]

以上見てきたところに拠れば、日比野本の歌句は、必ずしも原撰本という位置付けに適した本文を、余さず伝えているというわけではない。いずれの段階においてなされたものかが決せられない異文注記、見セ消チや補入なども存在しており、享受の間に他本との接触、あるいは他出文献による校訂などを少なからず繰り返していることは明らかである。このことは中間本・増補本についても同様である。

5　示唆的な異同

それでも、子細に検討すれば、系統間の近似性や原撰本としての古態性について示唆的な異同もまま見られる。

①384(1065)
中　**こかしき**（ママ）**をまき〳〵もくやまに**春**されは**この葉　**しのし**（ママ）**の**きてかすみたなひく

こかしきをまき（ママ）**〳〵もくやまにされは**（ママ）この葉　**しのし**（ママ）**の**きて霞たなひく

増　こらか手をまき　もく山に春されは木葉　しのきて

袋　こえがてをまき　もく山に春されば木のは　しのぎて　霞棚引く（七二一）

この歌では、日比野本と中間本に極めて特徴的な近似性を指摘し得る。まず「こらがてを」とあるべき第一句に誤写が認められるが、これが中間本の根幹本文と一致する。その上、第二句「まきもくやまに」とあるべきところ、日比野本では見セ消チを施すが、ともに「まき〳〵もくやまに」と「〳〵」が衍字となっている。第三句は、日比野本では補入記号を付して補っているが、ともに「春」が誤脱、第四句「このはしのぎて」と有るべきが、ともに「このはしのしのぎて」のようにやはり「しの」が衍字となっている。根幹本文における特徴的な誤りの一致は、単なる偶然であるとは思われない。日比野本と現存中間本との遠からぬ関係性を物語っている。

②329(992)　もゝしきやみかきか原のさくら花春したへすはにほはさらまし

㊥　にほはさらめや

㊙　匂はさらめや（鷹醍「ならめや」）

㊗　百敷やみかきのはらの桜ばな春したえずは　にほはざらめや（三七）

この歌は、その第五句「さらまし」が、中間本・増補本では「さらめや」とあって、新編国歌大観所収本文に拠れば続詞花集とも一致しており、日比野本のみの独自異文である。しかし、詞花集のうち、国立歴史民俗博物館蔵本では、第五句を「にほはさらまし」としており、一致している。この歴博本は、南北朝期の書写にかかる最古写本で、「現存諸本全ての源流に位置づけられる」現存「最善本」[11]である。この歴博本との一致は、日比野本の原撰本としての原態的本文の名残とも言えるのではなかろうか。

③390(1071)　あさ**またき**（みとり）糸よりかけて白露を玉にもぬける春の**青柳**

㊥　あさ**またき**　**青柳**

㊙　あさみとり　柳か

㊋　**朝まだき**糸よりかけて　白露を玉にもぬくか春の**青柳**（七二九）

㊀　浅緑　いとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か（古今集・二七）

この歌では、日比野本の根幹本文と中間本の初句が「あさまだき」とある。古今集[12]では初句を「あさみどり」として異同は見られないが、袋草紙では「あさまだき」としており、特殊な本文が、清輔の著述において共通している。第五句「春の柳か」が「春の青柳」とあるのも同様である。この箇所、古今集のうち筋切本・元永本といった平安書写の古写本、前田家本・穂久迩文庫本・天理図書館本といった清輔本や顕昭本の伝本、さらに教長古今集注や顕昭の古今和歌集注といった平安期の注釈書が「春の青柳」とあって一致している点からは、清輔周辺で利用された古い本文をそのまま残している可能性を示唆し、古今集流布本に一致する増補本本文に、後世の校訂による結果を推察させる。日比野本に、著者清輔の手になる原態的性質を見ることが出来るようである[13]。

五

以上、下巻の原撰本に位置付けられる日比野本の本文について概観した。子細に検討すれば、原撰本たる本文を見出すこともできるようではあるが、全体的には、後世における転写本として、また二次的な撰集であるためでもあろう、他本や典拠歌集など他文献との接触は避けられなかったようで、現時点においては、必ずしもその本文の一々が原撰本としての特質を保持しているとは言い難いと結論付けねばなるまい。今回、清輔の他編著も比較の対象とはしたものの、これとてもどこまで清輔執筆時点での本文を伝えているか、心許ない。

現存本和歌一字抄では、所収和歌の本文は既に原態を失ってしまっているものも多いようで、本文の異相が必ずしも各系統の特質を物語るものではなさそうである。各系統本に「どのような歌があるか」は明確化できるものの、それが「ど

のような本文であったか」は、容易には推断しづらいのである。『校本和歌一字抄付索引・資料』に新出伝本の本文を追加校合し、清輔の他の歌学書との比較・典拠歌集や他文献との比較を通じて、各歌ごとに検討していく必要があろう。

（1）伊井春樹氏「伝後光厳院筆『和歌一字抄』の本文」（島津忠夫先生古希記念論集刊行会編『日本文学史論　島津忠夫先生古希記念論集』平成九年九月　世界思想社）

（2）日比野浩信「原撰本『和歌一字抄』下巻」（『愛知淑徳大学国語国文』第三十九号　平成二十八年三月）、「和歌一字抄の新出伝本―下巻原撰本としての位置付け―」（『愛知淑徳大学国語国文』第四十号　平成二十九年三月）

（3）伊倉史人氏「『和歌一字抄』原撰本の成立―鶴見大学図書館蔵清輔奥書本の紹介と考察―」（和歌文学会六月例会口頭発表平成二十九年六月。なお、該本は第68回鶴見大学図書館貴重書ミニ展示「藤原清輔の歌書・歌学」（平成二十九年六月）で展示され、その解説には以下のようにある。

2『和歌一字抄』在下巻　綴葉装　一帖〔江戸初期〕写。

題詠の用例集。ある1字もしくは2字を標目として、その字を含む複合題・結題を提示し、その題を詠んだ和歌を集成する。伝本には清輔が編纂した当初の姿を留める原撰本の他、定家、西行、良経、宮内卿等の歌を含む、中間本、増補本がある。本書は、下巻としては、大阪青山短期大学蔵伝後光厳院筆本、日比野浩信氏蔵本に継ぐ原撰本。これまでに知られていなかった清輔自身による奥書を有し、崇徳院への進覧の時期が仁平四年（11154）（ママ）5月であったこと、また崇徳院が自身の歌を削除するよう求めたことなども判明する。

（4）和歌一字抄の本文の引用は、日比野本は注（2）の翻刻によってその通し番号を付し、（　）内に新編国歌大観番号を付した。また、和歌一字抄研究会編『校本和歌一字抄付索引・資料』（平成十六年二月　風間書房）を適宜参照した。増補本の引用は、比較的ランダムであるが、増補本間に異同の無い（少ない）歌を選ぶようにした。異同がある場合、『校本和歌一字抄付索引・資料』における略号とともに（　）内に掲出した。続詞花集・袋草紙は、特に断らない限り新編国歌大観に拠った。

（5）基本的に、原撰本の歌は中間本に、中間本の歌は増補本に内包されている。中間本と増補本が、各々別個に増補した結果であるとは考えられない。

(6) 井上宗雄氏「原撰本『和歌一字抄』について」『立教大学日本文学』第44号昭和五十五年七月)。なお、ここで井上氏がいう「三康本」は、上巻は原撰本二類、下巻は中間本に分類される本文を持ち合わせており、本稿で比較に用いる三康本は、その下巻である。

(7) 藏中さやか氏は『題詠に関する本文の研究』(平成十二年一月　おうふう)「第二章　原撰本『和歌一字抄』をめぐって　第一節　原撰本『和歌一字抄』上巻の基礎的考察」の注(2)に後光厳院本について、上巻Ⅰ系統本、下巻Ⅱ系統本で構成されていることを指摘しておられる。「果たして、Ⅰ系統成立時点で『和歌一字抄』は下巻まで完備していたのであろうか。」との疑問を提示なされた。断定には慎重を期したいが、傾聴すべきである。

また、同論の［補説］で「伊井氏が御指摘になっている本文欠脱例からも、後光厳院本が際立って優良な本文というわけではなく、両者(稿者注・後光厳本と三康本)は補完しあう関係にあるとみるべきではなかろうか」とされるが、本稿における日比野本についても結果的に同様のことがいえよう。

(8) 増補本間の異同は『校本和歌一字抄付索引・資料』(和歌一字抄研究会編　平成十六年二月　風間書房)に拠る。また増補本間に若干の異同がある場合は、参考までにその伝本の異同をも(　)に掲出したが、その略号もこれに拠った。

(9) 関根慶子氏『散木奇歌集の研究と校本』(昭和二十七年十月　明治図書出版)、関根氏・大井洋子氏『阿波本散木奇歌集　本文校異篇』(昭和五十四年七月　風間書房)

(10) 441 (1128) つくはねの山のふもとにすむ人はこのもかのもに秋をみるらむ
袋　つくばねの山の麓にすむ人はこのもかのもにあきをみるかな(八〇七)

のように、和歌一字抄と袋草紙以外に他出を確認できない歌でさえも、両者にはわずかながら相違があり、現存本による原態遡及の限界は否定できまい。ちなみに、増補本のうち芦庵本・日比野蔵一本のみが第五句末尾を袋草紙と同じく「かな(哉)」とするが、他は全て「らむ」とする。

(11)『国立歴史民俗博物館蔵貴重典籍叢書　文学篇第六巻　私撰集』解説。(平成九年　臨川書店)

(12) 古今集の異同は久曽神昇氏『古今和歌集成立論』(昭和三十五年三月～三十六年十月　風間書房)により、西下経一氏・滝沢貞夫氏『古今集校本』(平成十九年十一月　笠間書院)をも参照した。

(13) ただし、第四句の「ぬける」が、袋草紙では「ぬくか」とあり、家長本・前田家本・穂久迩文庫本・天理図書館本で「ぬく

か」、六条家本では「ぬくか（けるイ）」とあるなど日比野本とは異なっている。